

1P51

母親が自閉スペクトラム症をもつ子どもの就学前に体験した子育てのプロセス

横山 和世¹、井上 ひとみ²

¹元獨協医科大学大学院看護学研究科

²常葉大学 健康科学科 看護学部

【目的】

就学前の自閉スペクトラム症児を育てる母親が子どもや周囲の人たちとの関わりの中で体験した子育てのプロセスを明らかにすることである。

【研究方法】

学齢期の自閉スペクトラム症児をもつ8名の母親に対し、①就学前の子育ての体験の振り返り、②子育ての中に子どもの発達に感じた違和感や困難、③周囲の人たちとの相互関係について、インタビューガイドをもとに半構造化面接を行った。面接内容は、逐語録にし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的帰納的に分析した。

【結果および考察】

母親が、自閉スペクトラム症をもつ子どもの就学前に体験した子育てについて分析した結果、16の概念から【自閉スペクトラム症の障害特性がわが子に重なる】【障害の打ち明け相手の値踏みをする】【自閉スペクトラム症をもつ子どもの子育てを意識する】【自閉スペクトラム症児の子育てに果敢に取り組む】【障害特性の曖昧さに気持ちを揺れ動かされる】の5つのカテゴリが生成された。母親は、漠然と抱いていた子どもの発達に関する違和感が自閉スペクトラム症の障害特性と重なり、診断につながると安心するが、安堵とともに動揺など複雑な気持ちを抱え、周囲に障害を打ち明けるか否か相手を値踏みし始める。さらに、母親は、専門家や同じ障害をもつ母親との相互作用による影響を受け、自閉スペクトラム症をもつ子どもの子育てを意識し、子どもと向き合うようになる。母親は、さらに、子どもの成長過程で、可視化されず曖昧な自閉スペクトラム症の障害特性により、気持ちのゆらぎを体験しつつも、子どもとともに母親として成長していた。

【結論】

母親は、子どもが自閉スペクトラム症と診断されることにより、「子育て」が「障害児の子育て」へと移行を余儀なくされる。母親は、可視化されない曖昧な自閉スペクトラム症の障害特性と周囲の人々との相互作用の中で葛藤しながらも障害児の母として果敢に子育てに取り組む体験をしていることが明らかになった。

支援者は、子どもの発達段階や母親の気持ちの揺れ動きを理解し、多職種との連携のもと継続した支援を行う必要がある。

1P52

自閉スペクトラム症をもつ子どもの母親が発達障害の知識をペアレント・トレーニングスキルの実践に活用するプロセス

鈴木 ミナ子^{1,2}、永島 すえみ¹、上原 和代¹、
宮城 綾子³、山本 真充¹、田口 尚子¹、
瑞慶覧 さつき¹

¹沖縄県立看護大学

²琉球大学大学院保健学研究科

³児童発達支援「そだちのしえん」とりい

【目的】

ペアレント・トレーニング（以下PT）とは、行動分析理論に基づき親が養育スキルを獲得することで、親子関係の改善を目指したプログラムである。1960年代に米国で実証研究が始まり、その後、欧米を中心に様々なプログラムの開発、実践、検証が重ねられ、子どもの多様な問題に対処する治療法として、その効果が認められるようになった。わが国におけるPTの実践報告では、子どものAD/HDの改善、親の養育スキルの改善、親のメンタルヘルスの向上、養育ストレスの減少などが報告されている。

筆者はこれまで医療機関や公民館、地域の小学校などでPTを実践してきたが、そのなかで発達障害に対する親の知識不足がPTスキルの定着のしづらさに関係していると思われるケースを散見した。そこで、筆者は子どもの発達段階や発達障害の特性に関する知識を得るためのセッションを導入したPTプログラムを開発し、実践を行った。本研究では、既述のプログラムを受講した自閉スペクトラム症（以下ASD）児をもつ母親を対象にインタビューを行い、その語りを質的に分析することで、発達障害の知識をPTスキルの実践に活用するプロセスについて明らかにし、プログラムの有効性について検討したので報告する。

【方法】

既述のPTプログラムを受講した母親12名のうち研究協力の同意が得られた者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。1グループ4名程度で構成し計2グループ、インタビューガイドに従い半構造化面接法にて行った。インタビューの内容は研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準じて行った。本研究は、沖縄県立看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：20002）。

【結果・考察】

母親は発達障害の知識を得ることで、より発達障害をもつわが子の理解を深める事ができ、PTスキルの実践に関して根拠と必要性を持って臨むことができていた。しかし、多忙な毎日を過ごす中で母親自身に余裕がなくなり、PTスキルの実践がしづらい状況に至るケースもあった。また、父親がPTの実践に懐疑的であったり、実践に関して夫婦間の整合性がとれない場合、母親自身も実践の継続に自信が持てなくなっていた。今後は母親だけではなく、父親がPTを受講しやすいシステム作りの構築を早急に行う必要があると考える。